
花言葉は？

蘭奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花言葉は？

【Nコード】

N7175M

【作者名】

蘭奇

【あらすじ】

“私を忘れないで”

生きてる事の大切さに気付く時は、遅すぎるんだ。

死と隣り合わせて無いと、生きてる事が素晴らしい、
、だなんて感じないから。

不幸と隣り合わせて無いと、幸福も霞んで思えるもの。

血と本能

あなたと別れることを決めたのは

あなたを傷つけたくなかったから。

なんて、綺麗事。

自分が傷つきたくなかったから。

それだけなんだ。

「ああ、あちい。」

「余計暑くなるじゃねえかヨ。 黙るヨロシ」

んな事言われましてもねえ。

暑いのは仕方が無いと、言いたそうな口調だ。

「チャイナあ？ 傘もささずに大丈夫かい？」

「大丈夫な訳ないダロ。」

「ちよつとは頭使・・・うお？」

急に頭上から何かが降って来た（ように見えた）ので

思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。

見ると、沖田が上着を神楽に被せていた。

「馬鹿なのはどっちでい？ ぶっ倒れても知らねえぜい？」

知らないんだつたらこんなもん被せんなよなと、不満げに唇を尖らせる。

でも、ちよつと嬉しいって事はあいつには口が裂けても教えてやらないでおこう。

そんなくだらない決心をしていたら、よっこらせと、急にあいつがベンチから腰を上げたので慌てて声をかける。

「あ、おい。 もう仕事アルか？」

「何でい？ 寂しいのかい？ いや、寂しいんだろい。」

「ち、違うヨ。勝手なことぬかしてんじゃねえヨ。」

ぶっ飛ばすぞ、コラ。」

あいにく、傘は持ち合わせていないので素手でファイティングポーズをとる。

子供たちが好奇心な目で此方を見ているが気にしない。

「おいおい、仕事前なのにそんなの御免被るぜい。」

それなら、俺あこっちの方がよっぽど良いや。」

急に目の前が真っ暗になった。

反射的に目を瞑ると唇に何か生温かいものが触れた、と同時に離れて

視界が元に戻った。

あれ？ 今のなんだったんだろう。

必死に思考を巡らせていると、沖田が少し離れた所できりと笑っていた。

「御馳走様でした。」

ああ、そうか。 私あいつにキスされたのか。

何だか体が火照って来たな。

きつとこれは暑さのせい。

何だか頭もくらくらししてきた。

傘、持ってくれば良かったな。

再び目の前が真っ暗になって、でも今度はさっきみたいにすぐには元通りにならなかった。

「・・・ぐら！！ かぐ・・・あ
」

気付いたら真っ白な場所に居た。

今度は真っ白か。

この真っ白な場所が病室だと気づくまで少々時間を要した。

「お、起きたかい？　たく、傘なしで日中の公園でだらだらしてるからですぜい。」

傘ぐらい常備しとけてんだ。夜兎なんだからさ。」

「・・・りいかよ!!」

「え？」

「わりいかって言うてんだヨお!!」

夜兎なんだから・・・

・・・最強最悪の傭兵民族、夜兎族さんがよお。

私は夜兎。

・・・いくら抗ってみても血は争えねえな。

私は、夜兎。

・・・本能を拒絶したところで戦うお前は楽しそうだぜ？

私は・・・・・・・・

――何だこいつ!! 化け物じゃねえか!!

違う!! 私は・・・・・・・・

「違う!! 違うネ!! 私は、私は・・・!!」

「おい!! どうしたんでい。」

頬に何か温かい物が伝っている感触を覚えた。

何だろう。

そう言えば目も熱いな。

そこから先はどうなったか全く覚えてない。

ただ、覚えていた事が2つだけ。

大きい包み込むような安心感と、

濃厚な血の匂い。

この匂い私と一緒にだな。

大嫌いで、でもやっぱり大好きな匂いなんだ。

私の中に居る獣はこの匂いが大好きなんだ。

だから、戦うんだ。

でも、私はその獣と戦いたい。

私の中の獣と。

夜兎の本能と。

戦いたいんだ。

血と本能（後書き）

感想あれば大喜びで読みます！
へたくそですがよろしく願います。

t r u t h

「それは……かよ?？」

「……ですが。」

何だろう???

銀ちゃんの声が聞こえる。

まだ起きたくない、と駄々をこねる体を叱りつけ

のそのそと布団から這い出してみる。

まだ自分は病院に居るのだということは理解できたが昨日とは違う病室の様だ。

昨日は他の患者が居さえしなかったものの

幾つかベッドが並んでいた。

しかし、この部屋にはベッドは今し方自分が眠っていた物しか無い。
病室を移ったんだろうか。

「でも！！　そんなのあんまりじゃないですか！！」

少し苛立った様子の新八の聲が、開いた病室の扉の隙間から聞こえてくる。

もう少し近づいてみようと思い、立ち上がろうとすると

「おい、あんま大きな声出すなよ。」

、という銀時の声と扉を閉める音によって諦めざるをえなくなった。

銀ちゃんたち、私に内緒で何話してるんだろう。

私に聞かれちゃまずい事でも話してるのかな？

それなら、立ち聞きなんて無粋だ。

でも……………

「落ち着け新八。　大声出したってどうにかなる訳じゃねえ。」

好奇心旺盛な神楽にとって、内緒話を聞かずに我慢する。

なんて事は至難の技だった。

気付かれないように、そつと扉にもたれかかり傍耳をたてる。

「つでも！！ これじゃあまりにも神楽ちゃんが・・・・・・・・」

「大声出すなっつってんだろ??」

新八の必死の訴えは銀時のドスの聞いた低い声音により遮られた。

「それに、神楽に聞かれたら元も子もねえだろうが。」

やっぱり。

私には聞いてほしくなかったんだ。

残念だけど聞いちゃってるよ。

そう思うとほんの僅かだけど、優越感に浸る事が出来た。

・・・・・・きつとこの時の私は、

そう思う事で不安をやり過ごすしかなかったんだと思う。

銀ちゃんたちが私に秘密にしている事が凄く重要な事だって分かったから。

何を隠しているのかも、大体。

私の勘は良く当たるから。

でもこの時ばかりは当たって欲しく無いって、切なにそう願ってたのに。

やっぱり、私の勘は良く当たる。

「残念ですが。現在の医学ではどうすることも・・・。」

そこで途切れた。

扉の向こうの声は依然として耳には聞こえてくるのに

全く頭に入ってこない。

まるで日本語じゃないみたいだ。

視界が歪み出し、自分1人が違う世界に放り込まれた気分だった。

扉の向こう側からは、やっぱり声が聞こえてくるけど

何を言っているかはさっぱりだ。

扉を挟んだだけなのにとっても遠くに感じる。

扉を挟んだだけなのにもう2度と会えない気がした。

嫌だ！！

銀ちゃんに、新八に会いたい！！

その願いは神楽が思っていたよりも早く、

しかし最悪な形で叶えられた。

震える手でドアノブを回してしまい扉に寄りかかっていた神楽は
言うまでもなく銀時たちと再会を果たす事になった。

- - - 真実は、真実。

そして真実はいつも残酷なもの。

知らなければ良かったと、思う事の方が多い。

それが真実。

でも私は、真実を知れて良かったって思う。

真実は、真実だから。 - - - -

t r u t h (後書き)

すいません>(――)<

下手すぎる――――or z

ま、まだ続きます。

頑張ります!!

第三話

「ま、ばれたもんは仕方無いわな。」

とりあえず沖田呼ぶわ。

こんな事言つと縁起悪いかも知れねえが

いつ死ぬか分かんねえんだ。

ちゃんと伝えたいことは、伝えときな。」

「ちょ、ちよつと銀さん！

縁起悪過ぎですよ！！」

沖田を呼ばれるのは困る。

伝えたい事が無いわけじゃないけど。

それでも、会っちゃいけない。

「銀ちゃん、あいつを呼ぶのはやめてヨ。」

「何でだよ？？」

「会いたくないヨ、会っちゃいけないネ！！」

「・・・お前がそう言うんなら、わあったよ。」

「ありがと、銀ちゃん。」

「・・・私は怖かったんだ。」

あの時の私はグラスに溢れそうなくらい

水が入ってる状態だったから。

そんな時に、ちよつとでも心を揺らされたら

グラスから水が零れ出てしまいそうだったから。

臆病だった、私は。・・・

殺風景だった病室は数時間後には

同じ場所とは思えないくらい賑わっていた。

「神楽ちゃん、神楽ちゃんに元気出してもらいたくて

気合入れて卵焼きたくさん作って来たわよ。

たくさん食べてね。」

「姐御、実は私卵アレルギーなんだヨネ。」

「天人の神楽ちゃんがそんな厄介なものに

なる筈が無いでしょう。」

「そつだぞお。女に恥をかかせるもんじゃねえ。」

そう言つと、もっさもつさと卵焼きを頬張りダークマター

程なく泡を吹き始める近藤。ゴリラ

そんな馬鹿な一幕もあつたかと思えば向こうでは

「これは……結構イケるではないか!!

そばとマヨネーズ、一見珍妙な組み合わせだが

マヨネーズの程良い酸味がそばの味を引き立てて

こう、何か上手い感じになっておるではないか!!」

と、ばればれの変装をした桂が何か黄色い物体を手に

アバウトな解説をしていた。

「だろ？ マヨの良さを分かっているとは

こんなに気の合う奴に会ったのは久しぶりだぜ。」

いや、気が合っちゃ駄目だろ。

気付けよ。

そして税金返せよ。

こっちも十分馬鹿だな。

むしろこっちの方が馬鹿だな。

狭い病室でミントンを振り回す山崎をぼこぼこにする土方。

空中に、納豆で銀時への愛のメッセージを書こうとして納豆まみれになるさっちゃん。

それを見て冷ややかな視線を送る銀時。

さすが、復活が早いゴリラ（近藤？）の顔面にグーでパンチをお見舞いするお妙。

はあ、と神楽は1人ため息をついた。

自分のお見舞いに来た筈なのに皆好き勝手に暴れまわって（？）いる。

「大切なものは失って初めて気が付く」だなんて

臭い言葉だと思っていたけど、今なら分かる気がする。

私はあとのくらい生きれるのかな。

あとのくらい、こんな楽しい事があるのかな。

あとのくら、みんなと一緒に笑ってられるのかな。

でもそんな事考えても意味が無いのなら

今はこの時間を精一杯楽しもう。

なあんて、やっぱり臭いな。

見ると丁度、さっちゃんがお妙に銀時の事で

言いがかりをつけているところだった。

急に病室のドアが開いた。

皆一旦は馬鹿騒ぎを止めてドアを開けた主を見る。

そこには

一番会いたくて

一番、会いたくない人の姿があった。

「沖田・・・・・・・・。」

グラスが落ちて、碎ける音がした。

第三話（後書き）

やばいですね > (—) <
か、感想お願いします。

第四話 - - - 別れ

「沖田隊長・・・・・・・・。」

じゃ、じゃあ俺達お先に失礼しますね。」

そう言つと山崎は、ほら行きますよ、と

近藤達を連れて出て行つた。

それに続いてお妙や桂、さっちゃんもそろそろと病室を後にする。

新八も意味ありげに視線を泳がせた後

沖田に軽く会釈して出て行つた。

残つた銀時は沖田に何か耳打ちして

じゃあなと、背中越しに手を振って出て行つた。

みんな出て行つてしまったので

今病室に残っているのは、私と沖田だけということになる。

沖田は何か、もの問いたげな目で見てくるが

あえて気付かないふりをした。

今沖田に言おうか、言うまいか迷っている事があった。

言つと、沖田を傷つけることになるし

自分も、相当傷つく。

それでもやっぱり言わなきゃいけない。

多分これが、両方が一番傷つかずにすむ道だから。

「沖田、言いたい事があるネ。」

「・・・何である時、私はこんな決断をしてしまったんだろう。」

「何でい??」

「・・・何で、結果こんな事になってしまったんだろう。」

「私・・・・・・・・」

「・・・他にもつといい方法がいくらでも、有った筈なのに。」

「お前と別れることにしたアル。」

「・・・結局、両方が一番傷つく道をえらんでしまった。」

初め沖田は、驚くわけでもなく、ショックをつけたわけでもなくただ、じっとこっちを見ていた。

それこそ穴が開きそうなぐらい、じつと。

数秒してようやく意味が理解できたよう

大きい2つの目をこれでもかと、言わんばかりに

大きく見開いた。

でもすぐに、いつものポーカーフェイスをきめこんだ。

こんな状況で絶対思っては駄目な事だけど

そんな沖田の姿は滑稽としか言いようが無かった。

絶対に言えないけど。

「どついつ意味でい。」

あえて平静を装ったためにぶっきらぼうに言う沖田。

でも、その声は震えていた。

「そのままの意味ネ。」

そう言った私の声もきつと震えていたんだろう。

「もともと、好きでお前と付き合ってたわけでもないし。」

「そうかい。その言葉そっくりそのまま

バッドで打ち返すぜい。」

「じゃあ、丁度良いネ。」

「ああ、そうだな。じゃ、俺も帰るとしまさあ。

じゃあな。」

そう言うと、沖田は振り向きもせず

病室から出て行った。

そして、2度と私の前には現れなかった。

扉が派手な音をたてて閉まり、

後にはその余韻と虚しさだけが残った。

「ばいばい、沖田。」

彼が去っていった扉に向かって呟いた言葉は

セミの鳴き声によって掻き消された。

セミの鳴き声で室温がぐつと上がる。

今日は、暑いな。

ベッドに

ポタポタと、滴が落ちて

しみを作っていく。

クーラー、つけなきゃ。

第五話

5か月前、私は医師に

<原因不明、現在の医学ではどうにもならない>

と、告げられた。

どのくらい生きられるのかと尋ねたら

<あと半年、生きられるかどうか>

、だそうだ。

余命半年。

それは、14歳の私にはあまりにも過酷すぎる運命だった。

5か月前 - - -

「ちゃんと伝えたいことは、伝えたのね？」

妙の質問に

コクリ、と黙ってうなづいてみせる。

「後悔はしないのよね？」

少し躊躇したが、やはり黙ってうなづく。

「じゃあ、問題無いわ。」

後悔しないのなら、神楽ちゃんがそれで良いのなら

私は何も言わない。 言う事が無いもの。」

そう言うと妙は、優しく微笑み

私を力いっぱい抱きしめてくれた。

私は、妙の腕の中で声を張り上げて泣いた。

大声でしゃくり上げながら

赤ん坊のように、わんわん泣いた。

あいつと別れた日から色んな人が代わる代わる、
毎日のように尋ねて来てくれた。

皆、私を励まそうとして色々話しかけてくれた。

皆の心は嬉しかったけど、正直１人にしてほしかった。

何も喋る気分になれなかったから。

でも、姐御はそんな私の気持ちを察してか

何も言わない、と言ってくれた。

泣きたいだけ泣かせてくれた。

通り泣き終えた私に

もう大丈夫よ、とだけ言って

１人してくれた。

だから、あいつの事を思いだすことはあっても

もうくよくよと、塞ぎこんだりはしない。

やっぱりまだ辛いけど、立ち直れたのは

姐御がちゃんと泣かせてくれたから。

それから2週間くらいして銀ちゃんと新八がお見舞いに来てくれた。

丁度、私が入院して1か月が過ぎようとしていた。

2人はよく来てくれたけど

2人揃って、と言うのは珍しい。

お前が無茶しなければの話なんだけど、と前置きをして

銀ちゃんが話したのは、こんな内容だった。

医師から退院許可がでたので

万事屋に戻って今まで通りの生活がしたければ、戻っても良い。

但し、規則正しい生活を送る事。

体に異変を感じたら、即座に入院生活に戻る事。

勿論、万事屋に戻らない訳がない。

「銀ちゃん、私戻りたいヨ。」

絶対に戻るネ。」

「そう言つと思つてたぜ。」

「良かったね、神楽ちゃん。」

それから万事屋に戻り

文字通り、今まで通りの生活を送った。

銀ちゃんも新八も余命半年の宣告を

受ける前となんら変わらない態度で接してくれるのが

凄く嬉しかった。

ただ1つ違ったのは退院してからというもの

出かける回数がぐんと増えた。

もともと銀ちゃんに何処かに連れて行ってもらつ事なんて

滅多に無かつたのに、最近では週に1度は出かける。

遊園地や動物園、映画館等へ3人で行くときもあれば

姐御や新選組、マダオも誘って行くときもある。

先週は、山崎が密偵の任務中だったので

土方と近藤＋3人の5人でデパートに行ってきたところだ。

でも、やっぱりこのメンバーで行くと

仲良く買い物、という訳にはいかなかった。

近藤を見て勘違いした若いカップルが

動物園からゴリラが脱走した！と、通報して

駆けつけた新選組に近藤が連行されそうになったり。

それを見た土方が

自分たちの大将だよ、気付けよ！と、

怒鳴りながら止めに入ったお陰で何とか助かったが。

試食コーナーでは、

私が片っ端から全ての試食品を食べ尽くして注意されたり。

新八が試食品をタッパーに詰めて帰ろうとして注意されたり。

土方が他の人の分にもマヨネーズをかけて注意されたり。

結局最後には土方と銀ちゃんが喧嘩になったので

デパートに置いて帰ってきたら

後で銀ちゃんにぶつくさと、散々文句を言われた。

こうして過ごしていると、ちょっとした間だけ

自分があと半年も生きられない事を忘れられる。

でも、あれ以来

あいつに会っていない。

最初のうちは新選組のメンバーを誘う時

沖田も一緒にどうだ？と、銀ちゃんが

誘っていたけどあいつは断っていたそうだ。

土方と近藤も一緒に来いよと、誘ったみたいだが

頑として、首を縦に振らなかったと言っていた。

その内、誘っても無駄だからと

いう事で誰もあいつを誘わなくなった。

それ程、私に会いたくないんだろう。

でも、それで良い、と思う。

あいつに会ってしまったら死ぬのが恐くなる。

だからこれで良いんだ、きつと。

ぼんやりとそんな事を考えていると

ソファーに座ってジャンプを読んでいた

銀ちゃんが急にジャンプを捲る手を止めて

「今週は皆誘って旅行行くから。

勿論、バイキング付きだ。

楽しみにしとけよ、大食い娘。」

と、言った。

急すぎるだろ、と思ったがあえて口には出さない。

旅行なんて初めてだからものすごく楽しみだったから。

「きゃっほー！ マジでか、マジでか銀ちゃん！！

今から嘘だなんて言っても、許さないアルよ？

絶対行くアルよ！？」

そう言っではしゃぐ私に

本当だよ、と笑って答える銀ちゃん。

新八も旅行に行った事が無いので相当うきうきしている様だ。

2人で銀ちゃんの周りをとび跳ねながら回って

銀ちゃんにうるさい！と、注意された。

それでもやっぱり口元がにやついてくる。

さっそく姐御に知らせに行った新八。

それを見てシスコン、とからかう銀ちゃん。

――あの時私は、病気の事もあいつの事も

何もかも忘れて、ただただ舞い上がっていた。

でも、幸せはそう長く続かないんだ。

もし神様がいたら、

神様は凄く意地悪だ。
- - - -

第六話

- - - - 何で私なの？

もっと、他にたくさん居るのに・・・

何で私だけこんなに苦しい??

私が要らない子だから？

だから神様は私を選んだの? - - - -

あれから - - - 旅行に帰って来てからは悪夢だった。

帰って来た途端、本当に、もう少しで万事屋に着く。

そんな時に、急に発作が起こった。

もちろんすぐに病院に戻って、また入院生活に逆戻り。

何も私は、入院生活に戻ったから悪夢だと言ったわけじゃない。

確かに退屈だし、最初の方は万事屋に戻りたいと思った事も1、2度じゃ無い。

でも退屈なのなんて、まだまし。

生きてる証拠だから。

生きてるから、退屈だって思えるから。

最近では退屈だとも思わなくなった。

いつまた発作が起こるか、怖くて仕方が無い。

みんながお見舞いに来てくれる時は、一瞬だけど忘れられる。

でも晩に、1人になるとたまらなく怖くなる。

朝起きたらもう私は死んでるんじゃないか、って。

つい、本当に最近まで眠るのさえ怖い、と思っていた。

余命6カ月の寿命宣告を受けた、その日は猛暑だった。

8月8日・・・その日は本当に記録的な猛暑日で、6人の人が熱中症で倒れた。

皮肉にも、余命半年を宣告され、身構えていた私より早く死んでしまった。

その人達は、まさか自分が死ぬだなんて思ってみなかつただろうに。

入院中、ハゲ親父が一度だけお見舞いに来た。

病気の事には一切触れず、自分が倒したエイリアンのや、救った星の事を永遠に語り続けていた。

でも帰り際に、

「今俺がしなければいけない事は、エイリアンを倒す事なんかじゃないって事は分かってる。結局俺は、母さんの時と同じ事をしようとしてるのかもな。」

娘の死の際も看取れない奴だ。クソ親父と思ってくれて良い。

でも、一緒に居てやれなくて悪かった、と謝るつまりはねえよ。じゃあな？神楽ちゃん。」

そう言っただけで帰っていた。

「謝ってんじゃねえか、クソ親父。」

聞こえたか、聞こえて無いかは分からないけどハゲの背中に一言だけそう呟いた。

外は既に温かくなり始めてる。

もう、生きて春を迎える事なんて無いと、思ってたのにな。

窓を開けて、穏やかな春の空気を胸一杯に吸い込む。

病院の花壇に咲き誇る綺麗な青い海。

風に吹かれて波立つ。

「私を忘れないで、か。」

心地よい風に髪を靡かせながら、誰に言ってもなく呟いてみる。

暖かい、春の日差しに包まれて眠くなってくる。

睡魔に負けて、眠りの世界に入っていくほんの少し前、ピーという機械音が聞こえた気がした。

第六話（後書き）

かなり間あいてしまったあorz
予定では、次回最終回です！

第七話　a f t e r

ガチャン。

誤って、手から携帯が滑り落ちてしまった。

おい！　大丈夫か！？

地面に落ちた携帯から声が聞こえてくる。

「別に平気でさあ。ところで、俺にそんな事言っでどうしろってんですかい？」

「それは、お前が一番分かってるだろ？」

プツッ。

ツー、ツー、ツー。

電話を切った合図である、機械音だけだ虚しく耳にこだまする。

――さっき、医者が様子見に行ったら、静かに息を引き取ってんだと。

死に顔とは思えないくらい、苦しんだ跡がまるで見られなかったって。

まだあったかかったから、そんなに時間が経って無い筈だ、とも言ってたな。

あいつが、死んだ。

哀しい、哀しい、哀しい……。

哀しい、筈なのに涙が出てこない。

泣きたい気分にもなれない。

まるで、テレビを見てるような。

現実味がわいてこない。

何でかな？

俺と別れさえすればあいつは、死ぬことは無いって思ってた。

何時からか、そんな馬鹿げたことを考えたのは。

俺があいつに会わなければ。

俺があいつを避け続ければ。

そうしている限り、あいつが死ぬ訳なんか無いんだって。

本当、馬鹿らしい。

そう思って空を見上げてみる。

あいつとの思い出を振り、涙が出るのを待ったけど、やっぱり駄目みたいだ。

――お前が一番分かってるだろ??

分からねえ。

分からねえよ、そんな事。

ブラブラと、街をうろついていたいつもの公園にたどり着く。

自然を笑いがこみあげてきた。

まだ、あいつを探してるのか。

無意識の内に。

いつもの様に、特等席に座る。

でも、何時間たってもあいつが現れる事はなかった。

“そこは私の席アル。どくヨロシ。”

あいつの声音を思い浮かべてみる。

「あーあ、何してんだ。俺。」

わざと声に出してみたけど、気分は曇ったままだった。

もう、あいつの通夜はじまってんのかな。

本日は、快晴なり。

星が目ざわりなくらい輝いている。

重い腰をあげて、ふらふらと歩き出す。

向かう先は――

夜道は静かすぎるほど、静かだった。

第七話、after（後書き）

この話で終わるつもりだったのにorz

第八話　fin

あれから

もう既に2週間という時が過ぎようとしていた。

まだ肌寒くは有るが外はどんどん薄着になっていく。

あれから何もする気がしない。

抜け殻の様にだらしくなった俺は、傍から見れば

“元”恋人の死が哀しすぎて――

こうなってる様に見えるんだろうか。

「総悟、入るぞ。」

声と同時にガラガラ、と襖を開ける音。

その声が誰のものなのかは分かっているが

一応振り返って声の主を確かめる。

「近藤さん、何ですかい？」

やはりというか、そこには予想通りの人物が立っていた。

近藤は問いかけには答えずに、手に持っていた赤いノートを

部屋に置いて部屋から出て行った。

後ろ手で襖を閉めながら

「今のお前を見たら

あの怪力娘、一体何て言うだろうな。」

、という言葉を残して・・・

ぼんやりとした頭でノートの方に目を移すと

神楽の日記

事実だけを書いた大きな黒い字。

1ページ目を捲るとそこには8月8日の日付。

- - - 私、もう半年しか生きられないらしい。

いきなり過ぎて訳分かんないよ。

でも、その前にあいつにちゃんと言わなきゃ - - -

あいつが誰なのか

言わなきゃいけない事が何なのかすぐにピンときた。

- - - 別れよう、って言った時のあいつの顔が忘れられない。

きつと傷つけた。

これで良かったんだよね？

本当にこれで良かったのかな・・・ - - -

- - - 会いたい、会いたい会いたい

苦しいよ - - -

- - - 眠るのが怖い。

私このまま死んじゃうの？

総悟に会わないまま、1人で寂しく死んじゃうの？ - - - -

ページを捲る度に、あいつの病状が進行しているのが

手に取るようにわかった。

所々滲んでいて見えなかった。

あいつはどんな気持ちでこれを書いたのかな？

- - - - 今のお前を見たらあいつは何て言うだろうな . . .

何て言うだろう . . .

立ちあがって姿見の前に立つ。

そこには今の俺を偽りなく映した生気のない目。

こんな抜け殻の様な俺を見たら何て言うかな . . .

あいつなら・・・

「神楽、お前なら何て言う？」

口に出してみても気付いた。

あいつが死んでから初めて名前を呼んだ。

「神楽。」

噛みしめるようにもう一度声に出してみる。

「神楽は死んだ。」

目頭が熱くなってくる。

「死んだんだ。」

小さな嗚咽とともに涙が静かに頬を伝う。

「神楽は、死んだんだ。」

濁流に吞まれるような激しい感情とともに

涙が止めどなく溢れ出す。

子供の様に泣きじゃくる俺の耳に

あいつの――神楽の声が聞こえた気がして

久しぶりに笑みがこぼれた。

『私の分まで生きないと

お前がこっちに来た時にぶっ飛ばしてやるからな』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7175m/>

花言葉は？

2010年11月23日21時24分発行